

て移動してきている。それに反比例するかのようには、移民の末裔は三尾のアメリカ村から遠退いて行っているようである。

四 ブラジルの日本移民

神戸市中央区山本通三丁目十九の八番地に神戸市立海外移住と文化の交流センターがある。この鉄筋五階建ての建物が元移民収容所で、移民船に乗る人々が出発までの一週間をここで過ごした。必要な予防接種やブラジルの地理、気象、法律・経済のレクチャーを受けて、彼の地での生活に備えた。日用品の買い物は収容所から南へ延びる緩やかな鯉川筋の坂道を下って、元町の商店街で調達してきた。もう何回この坂道を通るのか。いや、日本の大地を踏みしめるのはあと何回だろうか。歩く人の足に自然と力が入っていった。

正面玄関の左手前に「ブラジル移民発祥の地 1919年4



海外移住と文化の交流センター

月」と石に彫り付けた記念碑が建っている。

日本人の多くがそうであるように、移民たちも詩人である。俳句や短歌を作って、文芸誌に発表した。その頃は移民文芸といったが、最近では日系日本語文学というようになった。日系人が日本語で書いた文学作品のことである。それを読むと移民の生活がどんな状態であったか即座に理解できる。俳句や短歌には簡単明解に事柄や感情が詠み込まれているからである。

優れた作品を集めて『コロニア万葉集』が編纂された。その中から何首かをお借りして移民の生活に思いを馳せてみたい。

なげかわす五色のテープとりどりのさだめを乗せて船はいづるも

黒川 修 一九三八年

紀伊水道をひた南下する移民船の祖国を離るる水脈をみつむる

梅木幹弘 一九三五年頃

赤道を越えて幾日夜毎に高くなりしよ南十字星

岩波菊治 一九二五年

二月の航海おえし喜びかさざめきあえる船舷の群

翁長助成 一九一九年

パトロンとコロノいささか争いて夕ベコロニアいたく淋しき

隠岐多春陽 一九三六年

余念なくむしる珈琲の手をとめて牛ほゆるきけば昼近きかも

川上春吉 一九二二年

肩や腕のいたきをたえて妻とともに山散らしに行くコロノの我は

大橋武三郎 一九三七年

船体が暴風雨にきしむ音のなお耳に残りて珈琲もちぎる

酒井繁一 一九三四〜一九三七年

コーヒー樹の僅かな影にもぐり入り犬の如くに真昼を憩う

井本 惇 一九三八年

うずたかく積みたる珈琲匂うさえ南の国に我が来しと知る

石火矢秋香 一九三七年

移り来し我が同胞の誰もかれも子の教育に思い煩う

池田重二 一九三八年

学校にも行けず畑に子守りしつつまんモの笛を吹く子よ哀れ

河村哉太郎 一九三七年

葡語学ぶときおい夜学に通いつつ仕事づかれの頭に入らず

今本義美 一九四一年

伯語もて話し遊べる我子見れば淋しと思ふ時もありけり

大花きみの 一九四〇年

わが住まむ町と思えばあわれなりあかしの花黄に散りしくも

石井衣子 一九二五年

いりたての珈琲ひけばほろ苦き香りただよう昼の厨辺

唐沢恵津子 一九四一年

ひたむきに土に生きんと移り来て原始林深き山を拓くも

小島鷗人 一九三三年

二十越^{はたち}して鋤とるすべも知らざりし身はブラジルの農夫となりぬ

三太世四 一九二六年

母の煮るフエイジョンの匂いにおいつつまだ起き出ざり日曜日の朝

佐原信男 一九三八年

こうして出帆、航海、コロノの仕事、休憩、子供の心配、家庭の安らぎ、希望、懐古などが詠われている。重苦しく感じられるのは移民の生活の実態を知っているからだろうか。それとも短歌そのものが持つ詩情がそれを感じさせてくれるのだろうか。

